

## 国 語 科

報告者：塚越 麻友美

### 1 課 題

読解と一口にいっても少なくとも、「単語」「文」「段落」「文章」の4つの段階に分けて考える必要がある。本校生徒は「単語」、つまり語彙力や「文」の段階から躓いていると思われる。スマートフォンの普及により、SNS利用や動画視聴の時間が増加し、小説や漫画に触れる機会が減ったことが1つの要因であろう。

### 2 目 標

授業の中では、教科書に登場した難解な語彙を解説することはもちろん、それらの類義語、対義語にも触れ、徐々に生徒の語彙力を増強していく。語彙力、読解力は一朝一夕に向上するものではないため、生徒の興味関心を喚起しながら長い目で見てこれらの力を養っていきたい。

### 3 具体的方策

第1学年では2学期に『竹取物語』を扱い、古典読解の際に重要になる「順接の確定条件」の訳出を学んだ。「順接の確定条件」には「①原因・理由②偶然条件③恒常条件」の3種類の訳出があるが、前後の流れを踏まえて文脈から判別するしかないため、読解力が求められる。古文の現代語訳文は現代文で扱う評論や小説よりも平易である。難解な文章と向き合うことに苦手意識を持つ本校の生徒においては、あえて平易な古文の中で読解力を育成することに意味があると感じたため、このような授業を構想した。

### 4 結 果

本單元には「已然形+『ば』」の形を有する「順接の確定条件」が5か所ある。これは本単元の第2時において初めて学習する文法事項である。初出時には、文法書を用い「犬も歩けば棒に当たる」「苦あれば楽あり」等のことわざで例示しながら講義を行った。その後は「順接の確定条件」を抜き出しながら、訳出として①～③のどれが相応しいかを考えさせた。生徒の取り組み状況は非常に前向きで、頭を悩ませながらも前後関係を見極め、訳出しようとしていた。本校の定期テストでは初見の古文教材を出題しないため、実際にどの程度生徒が理解し、力をつけたのかは測ることができていない。来年度は、授業及び定期テストの中で、生徒の習熟度をより的確に測る方法を考えていく必要がある。

### 5 次年度に向けての課題

「読解力向上」という目標達成に向けて年度始めに研究部を発足した。ところが、そもそも各科で「読解力」をどのように定義するのか、生徒とその目標を共有するのかなど、重要なことを決めきれないまま活動を始めてしまったという反省がある。話し合いの中で「生徒は読解力以前の問題で躓いているのではないか」「定期テストで読解力を測るのは難しいのではないかと」という結論に辿り着くことが多かったのも、前述の点に原因があるといえる。部員内外で積極的に情報共有や実践報告会を行い、各科の取り組みを知ることができたのは良い点である。来年度は、方向性をより具体的に共有した上で、活動を開始し取り組んでいきたい。